

說 范

歷代内務土木局長と其時代（二十五）

成田一郎氏（上）

清 水 生

成田氏の略傳
現内務次官の
山崎巖氏が昭和十五年の一月に

石川縣知事であつた成田一郎氏が土木局長の椅子についた

のであつた。

成田氏は明治二十七年十二月二十二日に青葉城下の仙臺市北三番町に成田喜十郎氏の長男として生れたが、小學校中學校と順次に優秀なる成績で了へて、大正五年三月から警保局長に榮轉したので當時校に入學してその英語科を卒業してゐる、氏は更に進んで京都帝國大學の法學部に入つて切磋勉強の上同九年

七月五日に卒業すると早くも同月二十六日に内務属となつて都市計畫課に勤務したのである。さうして同年十一月に文官高等試験に合格してこゝに將來の官吏として立派なる資格を得たのである。大正十年六月二十三日に埼玉縣の児玉郡長に任せられて、若き氏は暫く郡政に當つてゐたが、同十二年三月三十一日に警視廳警視となつて東京市内の元町、北紺屋、本富士の各警察署長を歴任して氏はこゝに警察官として直接都民の保護治安維持の任に當つて警察行政なるものを實地に體験したのである。超えて大正十五年五月二十一日に再び本省に入つて内務省社會局事務官となつてゐる。

土木局長の要職につく

昭和四年三月三十日には當時瑞西國ジュネーブに於て開催の第十二回國際労働總會に於ける政府代表委員の顧問を命ぜられて國際會議に出席して、その序でをもつて歐米各國を具さに視察して翌五年の一月十六日に歸朝したのであるが、歸朝後は社會局勞働部勞務課長の君島氏が

丁度外國に出張中なので課長代理を勤め、更に同年十二月二十八日に社會局書記官となつて勞働部勞務課長を命ぜられてゐる、同七年四月十五日資源局事務官を仰付けられ、更に同年八月十一日に内務事務官兼任となつたが同十一年三月十四日に内務省書記官兼内務大臣秘書官となり大臣官房人事課長を勤めてゐる。即ちその當時の内務大臣は廣田内閣のもとで潮惠之輔氏であつた、翌十二年一月二日に陸軍大將林銑十郎氏の内閣が出來ると、氏は社會局部長となり、更に同十三年一月十日に第一次近衛内閣の中程で内務省を離れて厚生省に轉じて勞働局長の椅子についたのである。平沼内閣成立後の後三ヶ月半を経過したる昭和十四年の四月十五日にまた内務系に歸つて今度は地方長官として石川縣知事に任せられて金澤に赴任したのであつた、而して氏は地方牧民官として相當の治績を擧げたが、在職約一ヶ年と四ヶ月で同十五年一月十九日第二次近衛内閣のとき安井内相のもとに三度本省に迎へられて土木局長の要職についたのである、

氏の土木局長在任中には彼の官制改革の結果土木局はその名稱を國土局と改稱さるゝに至つたが、氏は最初の國土局長として居据つたのであるが、間もなく同年十月十八日に現内閣である所謂東條内閣が成立すると二日を置いた同月二十日に地方局長に轉じて現在に至つてゐる。これが曩の土木局長であつた成田一郎氏の官界行路の大略である、一寸興信所の感があるが氏の家庭を見ると。

明治四年生れの嚴父喜十郎氏と同八年生れの母堂壽保女が居る、氏の賢妻そへ女は明治三十一年の生れで衆議院議員として政界に相當名を知られてゐる前政務次官守屋榮夫氏の令妹でやはり、氏と同郷である仙臺高等女学校出身の才色である、其の他に長男俊郎、二男園郎、長女迪子氏等の立派なる子女があるやうである。

廣島高師の墨窓

この氏の略歴を見ると、氏は學窓時代に廣島の高等師範に於て切磋勤勉したやうであるが、筆者はこゝで思ひ出すのは近來の儒者中でも最も有爲な人物であつた廣島産の彼

の賴山陽先生である、我が日本帝國が現在益々總力態勢を

強化して大東亜戰到るところに於て米英蔣等の敵性軍を殲滅して肇國の大精神たる即ち八紘一宇・大東亜共榮圈の建設に着々と邁進する程の國務が隆々として盛大に達したるのも思へばこれ等の情勢を惹起した本はいふまでもなく維

新の大業に基いた譯である、而してこの維新の大業は全く勤王の諸士、其の他有志の幾多人材の盡力に依つて出來たものであるが、其の動機となつて、それ等の志士を鼓舞して、この大業を成さしめた本は全く山陽先生の力であり亦先生の強固なる意志に感激したのであるといふことは何人

と云へども何等異論のない事實である、この山陽先生が幼少の頃の作で……男子不學則已、學則當超群……といふのがあるが、誰しも少年時代はこの立志論を読んで深く感ずるものであると同時に偉くならう、抜群のものにならうといふ志を立つるのは尠くないが、惜て能くその志を貫徹するものは至つて甚だ乏しいものである、これは筆者の推定ではあるが恐らくは成田氏も少年時代はこの山陽先生の

故郷出身の地たる廣島高等師範の學室に於てこの立志論を讀みてその感を深くしたのであらうと思はれるが、果して氏は同窓中でも拔群の區域に到着して今や内務省中でも最も重要な職責たる地方局長の椅子を占めてゐるのを見ても成程と頷かれる氣がするのである。

山陽の少年時代と氏の學生時代

山陽先生は生れ付き極めて天質穎敏の人であつたが、最早や十七歳の頃には毅然として大家の形を爲して居つたのである。餘程卓抜の人物であつたのに相違はないと思はれるが、十八歳の時分に叔父の杏坪先生に伴はれて初めて江戸に参つて、當時お茶の水にあつた昌平齋、即ち當時の大學に入つたのであるが、その十八歳の時、郷里廣島から上京の途中兵庫の湊川の河畔大楠公の墓碑に謁して

吾來下馬兵庫驛。想見訣兒呼弟戰此。刀折矢盡臣事畢。

北方再拜天日陰。七生人間滅此賊。

といふ詩を吟じたことは有名である、勿論その他にも有名な作が當時にも色々あるが、以て山陽先生が少年の頃から

何れだけの材幹を有してゐて、如何なる思想を抱いて居つたかといふことは、それ等の一端にも見へるのである、元々人間と云ふものは例外は別として大抵の人は、その少年時代に於て所謂聰明穎悟の人であつたならば後日必ずしも名を成すものであるが、敢て近世の大文豪であつて大思想家であり、しかも熱烈なる勤王家である山陽外史の如きは、偕て置いて、研學勉勵であり俊異の素質を持つてゐる、氏の如きは勿論他日伸ることは既に氏の同窓間でも噂されてゐたやうであつた、果して氏は單に高等師範を了へたのみでは満足せずして、他日大になすありと心密かに固き確信を持つて、更に進んで國家最高の學府に孜々として研學に餘念なかつたのを見ても、又その學業に於ても優秀の成績を常に保持してゐたのを見ても、氏は少青年時代を通じて普通ありふれたる凡庸少青年と異つてゐたかは推知出来るのである。

成田氏の今日は適材適所

兎も角成田氏が今日内務樞要の地位に坐するまでには、

氏の偉業がこれを然らしめたることは勿論であるも、彼の河内の土豪であつた大楠公も……後醍醐天皇の夢占に従つて藤原の藤房卿や笠置の寺僧快元和尚のやうな人々が推挽をしなかつたなら、千古不朽の忠臣正成も見出されずして、

從つて建武中興の偉業は成し遂げることが出来なかつたで

あらう。また、難を荆中に避けて躬ら瀧畝に耕してゐた俊傑諸葛孔明も劉備玄徳の三顧がなかつたならばあのやうの殊功を樹て、忠武の芳名を千載の後にまで傳へることも出来なかつたのであらう。適材適所は理想であるが、事實なかなかその實現はむづかしいのである、而して適材をつくることもむづかしいが、又これを見出して適所に置きて自由にその手腕を發揮せしめて其の功をなさしむることも更にむづかしいものである、要は適材を見出してその人物を適所に置くもの、適材として見出されるもの、との兩者の風雲の會は容易に發見されるものではない、これが出來ば實に偉大なものであるが、先づ天運とでもいふ方が適當であらう。……成田氏の英邁の質、卓異の材、既に學生の

頃から毅然として衆生を率ゆるが如く仰望されて居たが學窓を出てから所謂適材は適所に置かれて氏は益々その前途に對してその成果刮目して待つべく期待するに至つたのである。

國土局の新設

此の土木局長就任は前記したやうに、昭和十五年一月十九日であるから丁度阿部内閣瓦解のあとを受けて出来上つた米内光政海軍大將を首班とする所謂米内内閣の成立後二日の中であつた、さうして同十六年十月二十日現東條内閣に於て地方局長に轉じたのであるから、畢竟氏の土木局長在職は約一ヶ月と八ヶ月程であつて、兎も角も歴代土木局长中でも成田氏は永い方であつた、而してこの間に於て内務省では閣議の結果に基いて、萱場次官以下此等各局長等所謂内務省脳部が參加して時局に一層即應して戰時行政の運用に一層高度の計畫性、及び效率性を發揮せしめんがために内務行政の全般に再検討を加へて、特に現下の情勢に鑑みて國家防空の整備徹底を期し以て防空諸般の対策を急

速に促進することに重點を置いて、從來の計畫局を防空局としてその機構を擴充すると共に、防空の陣容を整備し更にこれと關聯する土木行政の運用に一層の重點主義を採用して國土の防衛保全開發を促進するために國土局を新設して以てこれまでの土木局の全部並に計畫局の都市計畫及び地方計畫を統合したのである。

内務省の改編要綱

かやうにして氏が土木局長在任中に内務機構の一部改正が行はれて國土防衛に萬全の態勢をとるに至つたのであるがこの初代の國土局長は成田氏である。今茲にこの内務省の改編要綱を見ると。

防空の緊要性に鑑み現在の計畫局をして防空に專従せしむるため之を防空局と爲し其機構を擴充強化すると共に他面事務と技術とを統合一元化して企劃、業務、整備、施設の四課を置いてゐる。更に土木事業一般に綜合性と計畫性とを賦與して重點主義に依る土木行政の運用を期すると共に國土の防衛保全開發の合理化と徹底とを圖る

國土局内の分課規程

この結果分課規程中にも改正が行はれたのは當然の歸結

ために現在の土木局の事務全部と計畫局の事務の一部とを統合して國土局を置き、尙其組織の單純化と能率化とを期して事務と技術とを一元化する爲に分課を整理統合して總務、計畫、河川、道路、港課の五課としてゐる。又地方に於ける戰時態勢の整備を促進し併せて中央地方の連絡を強化する爲、地方局に督務班室を設けて全國を四方面に分つて之の督勵に努むることゝし、現在の監査官其他をして之れに當らしむると共に地方局の監督課を廢してゐる。治安整備の萬全を期するために警保局分課の廢止を行ひ新たに警備課を設けて警備の態勢を整備して防犯課は廢してゐるが、戰時緊急要務處理のため局課の整備を爲すに當つては、なるべく各局課の人員配置を改正して之に當ることゝしてゐる。

これが大體當時内務機構の一部改正に伴ふ内務省の改編成の要綱である。

であるが、國土局内を見ると總務、計畫、河川、道路、港灣の五課に分かたれて總務課は土木事業一般の企劃調整に關する事項及び豫算資材に關する事項や土木會議並に土地收用に關する事項と他課の主管に屬せざる事項を擔任して

ゐる、計畫課は地方計畫並に都市計畫に關する事項や地方計畫及び都市計畫上技術に關する事項並に國土計畫策定上必要な調査連絡に關する事項等を掌ることとなつてゐる、

河川課に於ては河川、砂防、水利等に關する事項並に湖沼の埋築開拓及び使用に關することや更に災害土木工事に関する事項又は河水統制や水力工事に關する事項本省直轄河

川砂防工事用船舶及び重要機械器具の運用に關する事項等を以てしてゐる、若し夫れ道路課に至つては道路及び軌道に關する事項や、上下水道に關する事項及びこれ等關係工作事に關する事項又は自動車事業並に自動車運輸事業に關する事項其他内務省の直轄道路工事用の船舶及び重要機械器具の運用に關する事項を司つてゐる、港灣課に於ては港灣に關する事項、及び主として河川に關するものを除く運

河に關する事項並に海面の埋築開拓及び使用に關する事項や、本省直轄の港灣工事用船舶及び重要機械器具の運用に關することに當ることになつたのである。

内務機構改正と當時の次官談

當時此等と共にこの内務機構の改正に携はつた當時の内務次官であつた菅場氏はこの内務行政運用を計畫化し一層高度の効率發揮への改善に付いて。

最近時局は頓に緊迫の度を加へ、閣議に於ても……國政處理の戰時態勢化……の方針が決定せられたので、この方針に則つて内務行政を更に戰時態勢化し、内務行政機構全般に亘つて再検討を加へ迅速に之が再編成を斷行することとし必要な諸般の手續を了して、茲に實施の運びに成つた譯けである、「改正内容重複のため省略」本省の機構の改正は之を以て一段落に達したのであります、併し乍ら戰時態勢化は機構の問題に止まらず、之が運用乃至事務處理に就ても、高度の重點主義、效率主義を探用し、事務の簡捷敏活を圖る方針を以て着々之が實行に

着手してゐる。

とこのやうに云つてゐるが。

國土計畫の基本線に副ふて

一體この内務省の機構の一部改正に伴ふ國土局防空室局等の新設は新體制と國土計畫の基本線に副うて行はれたるものであると思ふが、……抑も國土計畫の問題は從來より専門の學者に依り或は内務、商工の兩省並に企劃院等によつて研究されて來たが、當時の近衛内閣は基本國策要綱中にこれをとり上げて國家の重要な政策としてこれが遂行を期することゝしたのであつた、而してこの國土計畫の輪廓と重大性は所謂此等戰時態勢化に重要な關係を持つたのである、都市計畫、交通計畫、土木計畫、水利計畫、人口分布

計畫、教育文化施設の配分計畫及び行政區劃の整備計畫等内閣が高度國防建設の現段階においては緊要の問題としたのである、殊に東亞の新秩序を建設し東亞共榮圈の確立を計るには現在に於てもこの國土計畫の實現は喫緊の重要な題である、従つて國土計畫は唯だ單に戦時態勢化のためのみではなく又戰時經濟からのみではなく平時に於ても極めて重要なことは云ふまでもない、従つてその一部の片鱗たるこの内務機構の改正は當を得てゐる、而して成田氏は昭和十六年九月五日に第三次近衛内閣で田邊治通氏が内務大臣で菅原藏氏が次官のときに内務初代の國土局長となつたのである。

筆者はこの原稿執筆中に止むを得ざる一家上の私事に遭遇して關西地方に赴いたが、その間に於いて成田氏は突如兵庫縣知事に榮轉されたので、丁度序いでもあり、神戸にて氏を訪問すべく暫時大阪に滞在してゐたが、氏は客月二十三日午後五時三十七分神戸驛着「つばめ」で來任、湊川、長田、生田、神戸護國の各神社に參拜廿四日には初登廳廳員に訓示各課巡視等、更に廿五日に神戸發姫路に赴き護國神社參拜、師園其の他を挨拶、更に廿六日は大阪に趣き關係方面に挨拶する等多忙を極める日定なので、編輯〆切も切迫するので以下は次號に譲ることとした。